

---

# 花魄（かはく）

雪村星依子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花魄<sup>かはく</sup>

### 【Nコード】

N8488N

### 【作者名】

雪村星依子

### 【あらすじ】

同じ木に三人以上が首を吊り、自殺者の無念が凝り固まって生じる、掌大の精霊「花魄」。曰く付きの花魄を愛玩する貴族。彼らに辟易する画家・蒼芹。しかし蒼芹は彼らに巻き込まれる形で花魄に関わることになる。とある花魄の所在を巡り、蒼芹は欠落した自分の記憶と対峙する。

花魄<sup>かはく</sup>は木の精である。その姿は人間の女のもので、色白で美しい容貌<sup>ようぼう</sup>、大きさは掌大<sup>てのひら</sup>、さながら美少女をミニチュアにしたようであり、鳴き声は小鳥の囀<sup>さえず</sup>りを思わせる。花魄は木の精だけに、基本的にその性質は植物と同じだ。放っておくと干涸<sup>ひか</sup>らびてしまうので、定期的に水分を補給してやらねばならない。姿形の珍しさと世話の手軽さから、花魄はまるでペットのように、愛玩物としての人気を博した。

しかし、それは一部の、所謂<sup>いわゆる</sup>上流階級にある人間にしか許されぬ流行であつた。花魄は希少種であるが故に、なかなか市場に出回らない。花魄は木の精ではあるが、樹木のように種から芽吹いて発生するわけではない。生物のように種の交配による個体の増産も出来ない。では、どのようにして生じるのかというと、実に奇異な方法で彼女たちは生まれる。そこが希少種とされる所以<sup>ゆえん</sup>である。

花魄は、同じ木に三人以上が首を吊り、その死者たちの無念が凝<sup>こ</sup>り固まって誕生する。とは言え、そこかしこに木々があつて、その中で同じ木に三人以上が首を吊る確立は低いと言えよう。だからこそ希少なのだ。その希少な花魄が貴族達に持て囃<sup>はや</sup>されるようになったのは、時代に因<sup>よ</sup>るところがある。長らく続いた戦乱の時代 苦しみの世を、それでもなんとか耐えて必死に生きてきた人々だったが、ことその年に限って大干魃<sup>かんばつ</sup>・大飢饉<sup>ききん</sup>に見舞われ、いつせいに今生に絶望したのである。家の傍<sup>かたわら</sup>にある太い幹を、枝を見て、そこにぶら下がるだけで地獄の苦しみから永遠に解放されるなら……と誘惑に負け、実行に移す者が多かつたのである。村民が徐々に首を吊つて村中の木の、枝という枝に死体が鈴生<sup>すずな</sup>り、ということも稀<sup>まれ</sup>ではなかった。結果、その年は花魄が各所で大量発生した。その囀りは人々の死への関心をいつそう高め、黄泉<sup>よみ</sup>へと誘い、まさに花魄が花魄を呼ぶといった状態であつた。しかし、裕福な貴族達は花魄に対して

不吉とも思わならしく、その鳴き声の愛らしさ、容姿の美しさ、何より小さな美少女という見た目の物珍しさからコレクションするようになって、貴族同士自分の所有する花魄の美しさをひけらかすサロンなども開かれていたという。それが花魄の最初のブームであった。

第二のブームが訪れたのは、第一次ブームが起こった乱世の幕引き後数百年を経た時代である。安寧<sup>あんない</sup>の世が訪れて国は潤<sup>うる</sup>い、それまで底辺を這<sup>は</sup>いつくばるように生きてきた人々ですら衣食住に困らぬ時代に、しかしそのような幸福の飽和した状態の世であったから、逆に花魄ブームが再燃したとも言える。人々は豊かである事<sup>あり</sup>への有難<sup>がた</sup>みを失い、その心には空虚を飼うようになった。何をやっても満たされぬ感覚を誰しもが抱いていた。そうした時代だったからこそ、歪<sup>ゆが</sup>みの象徴たる花魄が求められたのだろう。花魄は戦乱後減少の一途を辿り、満ち足りた時代に於<sup>お</sup>いて本来の、不吉を呼ぶ妖怪として怖れられるようになっていたのだが、近年再び愛玩物としての注目を浴びるようになった切っ掛けは、花魄が骨董品市場に出回るようになってからだ。花魄は干涸<sup>くわく</sup>らびても死ぬわけではない。乾燥して胡桃<sup>くるみ</sup>の殻<sup>から</sup>のような姿になって戦乱後の数百年の時を耐え、風化して形が崩れてしまえばそれまでだが、運良く原形を留めている物は水を与えてやればまた元の瑞々<sup>みずみず</sup>しい麗しさを取り戻すのだ。第一次ブームの起こったときの所有者達は花魄を美術品として愛<sup>め</sup>でてみただけから、その保存方法もきわめて嚴重できちんとしていた。それが幸いし、先年発見され、入札会<sup>オークション</sup>にかけられた花魄「雪花<sup>せつか</sup>」などは、あまりにも綺麗な状態を保っていたことで話題になった。梨木から生じたという花魄で、その花のように白い膚<sup>はだ</sup>、髪を持ち、容貌は実際の女以上に繊細、また鳴き声も慎ましかで愛らしかった。競り落としたのは三大貴族のひとつだ。花魄が富貴の層の趣味であることは今も昔も変わらない。現代でも自殺をする者は少なくはないのだが、木にぶら下がるものなら人目についていけない。練炭を使用した方法が耳に馴染みあっても、首吊り自殺のニュースは滅多に聞

かぬ。花魄の生じ易い時代とは言えない。この時代においても花魄は希少な存在なのだ。

蒼芹そうきんは雪花の掲載された雑誌を無造作に放り投げ、溜息を吐いた。寒生の蒼芹にとっては理解し難い趣味だ。馬鹿馬鹿しいとさえ思える。

「まあ、旦那様ったら。粗末に扱って……」  
中庭に吊した洗濯物を取り込んでいた妻の翠緑玉すいりょくぎよくが、足元に放り投げられた雑誌を拾い上げようと屈んだ状態のまま何気なく頁ページを捲めくる。

「よせよせ、翠。そんなド低俗な雑誌なんぞ、お前が読むものではない」

蒼芹は椅子から立ち上がり、妻の小さな背中越しにそれを取り上げる。振り向いた妻の目は何やらうつとりと輝いている。

「綺麗なお人形の絵なのね。旦那様だんながお描きになったのでしょうか？」

夏野を思わせる緑色の双眸そうぼうの、期待の込められた純粹な眼差しを直にぶつけられれば、蒼芹の仏頂面にも思わず羞はじらいの朱がさす。

「旦那様の絵は妾あたしだけではなく、他の人にも美しく見えるのよね。だからこういうお仕事も依頼して頂けるのよね」

「おだてたって何にも出ないぞ」

蒼芹は照れくさそうに鼻の頭を指先で搔かく。

「別に、妾はおだてているわけじゃないわ。旦那様のことを自慢に思っているの、本当よ」

翠緑玉は言つて、少し躊躇ためらった後、

「でも、おだてて旦那様が妾のことを絵にして下さるなら、もっといっぱい褒めちぎるわ」

蒼芹はさつと表情を曇らせる。

「それは……駄目だって、いつも言っているだろうに」

「照れくさいと仰るのですよ？ でも本当にそれだけかしら。妾は、旦那様は妾のことを描きにくいのではなくて、描きたくないのでは

ないかと　思うことがあるわ」

翠緑玉は諦観の表情に、少しだけ哀しみの色を添えて蒼芹を見上げる。

「旦那様は妾のことを美しい、まるで天上人のようだって、畏れ多くて絵に出来ないって仰るけれど、本当は妾が不細工だから、ありのままを描いて妾の機嫌を損ねるのがお嫌なのでしょう？　そんなことは心配なさらなくていいのに」

「馬鹿仰い」

蒼芹は一瞬声を大きくし　言葉を詰まらせる。この話題での問答は毎度のことであるが、答えを出そうとすると蒼芹はいつも言葉を失う。

翠緑玉は、自分の妻だからという鼻<sup>ひいき</sup>目抜きにしても、本当に美しい娘だと蒼芹は思う。事実、訪ねてきた友人や客人に奥だと紹介すると、必ず彼らのやつかみを買う。彼女のことを天女のように畏れているのも事実だ。絵に描きたい対象ではある。しかし、どんなに絵の技術を駆使しても、ありのままに描けそうな気がしない。それほど彼女は神々しい輝きを放っているし、夫婦として朝夕を共に過ごしているのに、極度の緊張の中遂げた初夜以降、未だに気安く彼女の膚に触れられないのもその所<sup>せい</sup>為だ。本当は毎日顔を合わせるのだって緊張を要する。時には、自分が彼女の夫でいいのだろうかと本気で悩むこともある。そう言うと、彼女はいつだって「貴男<sup>あなた</sup>以外の伴侶<sup>はんりょ</sup>なんて考えられない」と、眩<sup>まはゆ</sup>いばかりの朗笑を以て蒼芹の不安を吹き浚<sup>ぬぐ</sup>うのだが　、

それでも蒼芹は描けない。

どんなに自分の腕が絵画の対象の姿をリアルに描くばかりか、そこに生氣まで塗り込めるような生き生きとした絵を描くと評されるものでも、彼女をカンバスに閉じ込めるのは無粋であると感じる。どれほど蒼芹がリアルに描いたって、それは一枚の静止画にしか成り得ぬ。翠緑玉は黙っていると彫刻のように美しいが、感情に合わせて動く表情はもつと素敵なのだ。それは翠緑玉の魅力の一部分だ。

自分の前でいくつもの姿を見せてくれる彼女の、全てを描こうと思つたところで描ききれはしない。くるくると目まぐるしく変化する翠緑玉の表情一つを捉え、己の筆で思うままに描くには、蒼芹は未熟である。未だに彼女を、完全に自分のものに出来ぬように。

だから、自信がないのならいつそ描かぬ方がよい。そう思つて、毎回言葉を濁し妻の要求を拒むのだが、そこに後ろめたさが生じるのは、拒んでしょんぼりする妻が可哀相かわいそうという以上に、また描く勇氣が持てなかったという己への不甲斐ふがいなさを感じるためである。

しかし蒼芹が嫌がつっていると判ると、それ以上我を通そうとしないのが翠緑玉の賢いところだ。翠緑玉は、蒼芹の仕事中心アトリエには近寄ろうとしない。老僕を遣わせて茶などの差し入れをすることはあつても、蒼芹の許しを得るまでは立ち入ってはならぬと彼女の中で決めているらしい。作業を人の目に晒さらすのがそもそも苦手な蒼芹は、翠緑玉の配慮に常々救われる。そうして絵が完成すると、早々と包んで依頼主の許に送ってしまうから、家の中に於いて翠緑玉が完成された絵を生で見る機会にはほぼ無い。蒼芹はどんなに上手い絵を描く画家だとしても、大家と呼べるほどの大物ではないから、雑誌の挿絵などの仕事を出版社に勤める友人伝手に回して貰つては小金を得るといった有様で、家計はいつも火の車である。家計を預かる妻は必要以上の出費に顔を渋くするのが常なのだが、それでも蒼芹の絵への投資は別らしく、雑誌に載ると喜色満面で書店へ出掛けてゆき、そこで初めて夫の絵を目にする。それを知った件の友人が翠緑玉にこつそり原画を見せてやるようになったのは最近のことだが、翠緑玉も直接感想を述べてくることはないし、逆にそうしたいじらしさが居たたまれず、せめてそれくらいは許してやるべきかと目を瞑つむっている。

しかし、普段は露わにせぬ願望を直接訴えてくることは、彼女にしては珍しいことだ。

「妾も、この子のように絵にされてみたい」などという台詞せりふを、今まで聞いたことはない。

「この子と妾、比べたってこの子の方がよっぽど天女のように。その花魄は描けるのに妾は描けないなんて……狡いと思つのは妾の我が儘かしら」

「お前は私の苦勞を知らん。その雪花だつて、描くにはすごく抵抗があつたのだ」

雪花は、翠緑玉の美に近いものがあつた。デッサンをとるときもそれが気になつて、なかなか手が進まなかった。しかし一度それはモノだと割り切ると、蒼芹の遅筆も速まつた。だが、その所為で花魄の持つ感情を絵に塗り込めることが出来なかったが。

「だから、これは私にとつて失敗作だ。今となつては、こうして形に残つてしまつたのも羞恥の極みだし、画家として未熟なこの腕で、花魄よりも美しいお前を描く自信が無い」

手にした雑誌を卓上に放つた勢いのまま気持ちを吐露すると、翠緑玉は何か言いたげに口を開きかけ 止めた。

「……御免なさい。我が儘を言つて、旦那様を困らせてしまいました」

夏野の瞳が潤むのを見て蒼芹は狼狽える。もう少し声に孕んだ棘を抑え、苦渋に歪む表情も和らげてやればよかった。蒼芹は翠緑玉が生まれる以前にこの世に生を受けた大先輩なのだ。小娘同然の翠緑玉に対して感情のコントロールもしてやれぬとは大人げないものだと後悔する。

「ああ、悪いのは私の方だ。すまない翠緑玉。だから、泣いてくれるな」

蒼芹は慰めようと、俯いてしまった妻の髪に恐る恐る触れようとする。すると翠緑玉は近寄つた蒼芹の首に力一杯しがみついたので、彼は顔を真っ赤に染めて固まつてしまった。

「いいえ、妾が変にやきもちを焼いたのよ。本当は、そんな必要ないのに……」

絵にされないことがそんなにも悔しかったのだろうか。彼女が頼ずりしてくるのを感覚として感じられぬほどの緊張に漲る蒼芹は、



思考のまだ冷静な部分でばんやりと考える。

「お詫びに、今日は焼肉にしましょう」

耳朶<sup>じだ</sup>に告げられ、蒼芹は思わず「おおっ」と喜びの声を上げる。財布<sup>ひも</sup>の紐を握る妻は、最近腹部が気になり出してきた蒼芹を思い遣つてのことだが、好物の肉をなかなか与えてくれないので、それを許されるのは素直に嬉しかった。

市に出ると、肉屋の軒先で出版社に勤める友人の黄戒<sup>こうかい</sup>に出くわした。

「やあ、お揃<sup>そろ</sup>いで。ちょうどよかったよ、朗報を持って君の家に向かうところだったのだ」

蒼芹と同じ年ながら黄戒は十も老け込んで見える容姿で、好々爺然とした態度を常に取り。そんなことをうっかり口にすればすかさず、

「君の方が三十半ばのくせして若く見え過ぎなのだ。見た目で言えば私の方が年相応なのだ。好々爺？ そりゃ職業病というやつだ。何せ作家先生方といえは一癖も二癖もある方々ばかりだ。ご機嫌を損なわぬよう謙<sup>へりくだ</sup>つていれば、好々爺にもなるのだっ」

と、延々愚痴を聞かされるので、注意が必要だ。

「朗報って何だよ？ 長慎<sup>ちやうしん</sup>（黄戒<sup>おうかい</sup>の字）」

翠緑玉が肉を物色する間、客の邪魔にならぬ位置に退いてから黄戒に問う。

「雪花の絵の依頼主である華氏の、ライバル格である白氏がな、華氏の鼻を明かしてやりたいが為に、雪花よりも美しい花魄<sup>はく</sup>を手に入れたんだと。それで、雪花の絵を描いた君に、その花魄の絵を描いて欲しいのだそうだ。報酬は、華氏が雪花の絵に出した三倍出すだよ。どうだ、君。勿論受けるよな？」

黄戒は葉巻をスパスパ吸いながら、嬉しそうに言った。煙草嫌いの蒼芹は軽く眉を集めて友人を睨<sup>にら</sup>みつつ、

「貴族の道楽には恐れ入るな。ところで、三倍の言葉には誘惑され

るが、何で三倍なのだ」

「その花魄を入手するのに、華氏が雪花を競り落とした額のちょうど三倍かつたのだと」

蒼芹はそれを聞いてますます呆れる。

「くだらん張り合いだ」

「貴族なんてそんなものだよ。金を湯水のように使うことしか愉しみがないのさ。それで、引き受けるだろう？ 君は」

蒼芹の表情が僅かに曇る。

「なんだよう。まさか、その気がないって言うんじゃないだろうな？」

彫りの深い蒼芹の面は、そのままいれば道行く女たちの熱い視線を受けるほど端正な整いをしているのだが、眉を寄せると人相が悪くなるらしく、黄戒が腫れ物に触れるような目をして蒼芹を見てきたので、これはいかん、と、刻まれた眉間の皺を指で解す。

「いや、花魄の絵 とうか、女の絵の仕事は暫く遠慮したくつてさ」

苦笑混じりに断ると、

「奥方に嫉妬されたか」

ずばりと見抜いた黄戒に、蒼芹の方が面食らう。

「なんだ、愚妻が君に何か言ったのか？ 何故判った」

「夫が、他の女がモデルの絵を描いて、気分の良い妻が全体いるかね」

勘さ、と言い置いてから答えた黄戒を蒼芹は軽く睨む。

「君の鋭さには恐れ入るね。しかし、その通りなのだ。妻が、私も描いてくれと懇願する。それを、自分が不甲斐ないばかりに断るのが、えらく辛いのだ」

「なんだい、よっぽど願いを叶えてやるほうが、色んな意味で価値あることじゃないか。君の奥方ほど美しいモデルはそう居ないぜ」

黄戒が吸い殻を路上に捨てようとするので、すかさずそれを取り上げ、携帯用の灰皿に収めると蒼芹は、

「だからだ。恥ずかしい言い訳だし、惚気のそけていると思ってくれても構わんが、俺はあれを描ける気がしない。描きたいと思ってもな、俺如きの筆であれを描くのは無粋だと思う」

黄戒は残念そうに一度項垂れ、

「愛妻ぶりは変わらないな、季献きけん（蒼芹の字）。君は奥方を想ってそう言うのだろうがな。だったら尚更、今回の依頼を受けたまえ！」

一転、顔を輝かせてくるので、嫌な予感がした蒼芹は表情が渋くなるのも厭いとわずに、

「何でそうなるのだ。今断ったばかりだろうに」と文句を言うと、黄戒はハハハと笑い、

「また雪花の時みたいにな、やらぬとこねるのではないかと思ってな、気を引くネタを用意してあるのだ」

「こねるって、こねたつもりでは……」

蒼芹がごによごと口の中で言い訳を唱えるのを、黄戒は無視して続ける。

「でな、これはお前の気をさぞ引くだろう。蒼先生が描いて下さるのなら喜んど、気前のいい氏は、まだ誰の目にも晒していない花魄を見せて下さったのだが、なんとな」

黄戒が勿体振るので、無視された不愉快さもあつた蒼芹は、

「何だ、早く言ったらどうだ！」

苛立ちの露わになった声を上げると、ちょうど肉を買い終えた翠緑玉が店の奥から出てきたところで、夫が声を荒げているのを心配そうに見上げていた。

「どう……なさいました？旦那様」

夏野の瞳が不安に揺れているのを目の当たりにし、蒼芹は簡単に周章する。

「いや、何でも。大事ない。それより、買い物は終わったのかい？」慌てて大げさに手を振り、問題の無さをアピールすると、翠緑玉も多少訝しんだがすぐに屈託のない笑顔を浮かべ、

「今日は長慎様もおいでですし、腕を振るわないとね！」

購入した肉の、大きな包みを掲げてみせる。

「えっ、私も混ぜていただけるのですか？」

黄戒がさかさず媚<sup>こ</sup>びに満ちた破顔を見せるので、蒼芹は心中舌打ちする。

「またお仕事のお話を持って来て下さったのでしょうか？　そのお礼です」

「それでは、お祝いも兼ねましょう。彼はきつと受けるだろうから」蒼芹は、調子に乗って話を進める黄戒の耳を引つ張り、

「勝手に話を進めるな。私はまだ受けていないのだから。奥よ、お前も本気にとるなよ」

釘を刺すと、いつもの巫山<sup>ふざけ</sup>戯<sup>あそ</sup>合<sup>あ</sup>いなのだと覚った翠緑玉はくすくすと笑う。

「はいはい。でも、お持て成しはしなくちゃね。長慎様はお客様ですもの」

嬉しそ<sup>きびす</sup>うに踵<sup>かかと</sup>を返す彼女に、黄戒は何か勘違いをしたらしい、

「いやあ、お前という男がいて、俺も案外好かれたものだ」

などとほざくので、蒼芹は大真面目に友人の頭を平手打ちしておく。

「それでは、ごゆつくり」

食事の席を用意した妻は商談に遠慮して早々に奥へ引つ込んでしまった。そもそも蒼芹としては、老け顔の黄戒相手より夫婦水入らずで卓を囲<sup>かこ</sup>いたかったのに。それは黄戒も同じだったようで、

「奥方のお酌<sup>しやく</sup>を戴けると思<sup>おも</sup>って期待していたのに……」

心底ガツカリした様子で、ついつと蒼芹の方に杯を持つ手を向ける。

「悪かったな、俺の酌で」

蒼芹は酒を注ぎ、しかし「夫の権限で呼び戻してやろうか」とは口が裂けても言わない。

「悪いなあ、私がお邪魔したばかりに。奥方は一人で食事を摂る気かね」

黄戒は本当に悪いと思っっているらしく、哀れさを禁じ得ぬほどに眉尻を下げ、額に八の字を書いている。

「気を利かせたのさ……。それに、あれは菜食主義だからな、どうせ肉は食わんのだ」

蒼芹は諦めて肉叢しじむらに箸はしを伸ばす。どんなにガツカリな状況だとしても焼肉は食えるのだし、それはいつだって旨いのだ、と心の中で唱えながら、熱くなつた鉄板に生肉を載せる。

「そうか？　ちゃんと食べてくれていればよいが。君の細君はどうも痩やせすぎだ。本当にちゃんと食べさせてあげているのだろうね？」  
「下世話を焼いていないで、君も自分で焼きたまえよ！」

蒼芹はイラツとして乱暴に肉を敷いてゆく。

「それより、君は私の気を引くネタを用意してあると言ったが、そろ、言ってみるよ。今、非常にご機嫌斜なひめなこの季献様を靡なかせるネタつてやつをさ！」

促され、「おお、そうだったな」と言つて、何故か黄戒は翠緑玉が引つ込んでいった方向を気にした様子で声の大きさを抑え、

「君が人物……特に女を描くのが苦手なのは、そも実際の女が苦手なのだろう？」

依頼を厭う理由を明かしたいのだろうが、論旨がずれていると蒼芹は反論する。

「普通の女ならば描けるよ。実際、貴婦人の肖像画だって受けている。君が回してくれるじゃないか、そうした仕事を」

忘れていいのか、と付け足すと黄戒は「そう言えばそうだったな」と調子よく笑う。

「雪花を描くときにも言つたが、初めに嫌がったのは、理解し難い貴族趣味を増長させるようで気に入らなかつたからだ。まあ、君が冷やかすつもりで構わんと言つから私もその気持ちで引き受けたんだ」

「しかし君は途中、俺の筆では描き上げる自信がないなどと泣き言を言っていた。あれは何故だ？　どういうわけか吹っ切れて、きち

んと仕上げてくれたので追及もしなかったが」

「それは……」

作業中は必ず監視の従者が付いて窮屈きゆうくつだった上、アトリエとしてあてがわれた温室に放たれた雪花は、逃げ出さぬよう足に鎖を巻かれていて哀れさを禁じ得ず、蒼芹は創作意欲を失ったのだ。それに加え……蒼芹の大きな双眸に覗かれても微動だにせず視線を虚空に向けるだけの花魄の瞳に、呑み込まれてしまうような錯覚を覚えた。可憐かれんな瞳に潜む人外の魔 男を虜とりこにする妖艶ようえんなる女の性を、その虚ろな瞳に見てしまった。否、己が女に対して抱く邪心を、花魄の瞳を介してまざまざと思い知らされたと言うのが正しい。天上の美触れてはならぬものを暴く背徳の行為 それは、蒼芹にとっては女の体を開くのと同義である。友の手前強がったが、本来蒼芹は女に対して臆病者だ。それでいて関心は強く、中身の見えぬ箱を明けるときの高揚感を女に感じる。蒼芹にとって女は花魄同様得体の知れないものだ。それを自らの手で暴くというのは、何にも勝る快感を得られるのではないか。

蒼芹の筆は、確かに雪花の美しさをカンバスに正確に、そして緻密に写した。だがその都度、カンバスに載せる線に人外の魔への畏れ 己の女に対する屈折した関心と疚やましさが滲にじみ出るようで、それ以上心を込めて描くことが出来なかった。蒼芹は、それからは雪花をモノとして見ることにした。その小ささを際立たせるために花器という小道具を添わせたのだが、雪花すらもその一部として捉え、蒼芹は無心に努めて「静止画」を描いたのだ。無機物であると認めなければ、蒼芹は筆を絶つしかなかっただろう。しかし、作業はひどくつまらなかった。対象を見、色を載せる、その繰り返し。心の乗らぬ作業は単なる作業でしかなかった。絵を描く者としての自負を蒼芹なりに持っていたのに、これではものを創る者としては落第だ。

全てを包み隠さず語る勇気が足りず、蒼芹は曖昧あいまいな答え方をして話題を戻そうとする。

「どうだつていいだろう。それとも君は俺に、女に意気地が無いと  
黽<sup>なぶ</sup>りたいだけなのか？」

蒼芹の人相がまた悪くなるので黄戒は慌て、

「そういうわけではないよ。気分を害したなら謝る。しかし君が女  
を……というか奥方を特に大切に思っているのは解っているつもり  
だ。その奥方も自分をモデルにして欲しいと願っていて、その願い  
を叶えてやらぬでは、夫としてあまりに薄情だと思わないか？」

詫びながら痛いところを突かれたので、蒼芹は言葉を詰まらせて  
しまう。

「そりゃあ、そう思わぬ事も……」

「だろう？ 君は奥方に対して慎重に過ぎるよ。だから君は白氏の  
依頼を受けるべきだよ。奥方を描くときの練習になる」

強引な繋げ方に蒼芹は心底辟易<sup>へきえき</sup>し、

「何でそうなるのだ！」

危うく手にした箸を投げつけるところであつた。黄戒はまあまあ、  
と言つて宥<sup>なだ</sup>め、

「そこが君を靡かせるネタの重要なところでな、その白氏の花魄と  
いうのが、君の奥方にそっくり 否、鏡に照らしたように瓜二つ  
だつたのだよ！」

「え」

驚かせるつもりで大げさに手を広げながらネタを明かした黄戒の、  
意に添うようで気に入らなかったが 実際蒼芹は驚いて、暫し沈  
黙してしまった。

翠緑玉に、瓜二つの花魄。

それを知つて、どうしてだろうか、ものすごく胸がざわつき始め  
る。

頭痛までしてきた。

「君に奥方を描く気があるのならな、今後のためにその花魄で練習  
をすればいいのだよ。君は奥方に緊張しても、何の思い入れもない  
が奥方そっくりの顔をした花魄相手ならば、雪花のように割り切つ

て描くことも出来よう。どうだね、良い案だと思わないかね」

黄戒が得意げに話すのも、なんだか遠くに聞こえる。

蒼芹の脳裏に黒い記憶が走馬燈のように過ぎていく。

抜け落ちた記憶の断片だろうか。嫌な臭いの伴う記憶だ。

ひどく血生臭い。

それはきつと、目の前にある肉叢の臭いのはずだ。それなのに、獣の血の臭いとは明らかに違う異臭を、蒼芹の鼻は感じている。

「季献大丈夫か、急に顔色が悪いぞ」

蒼芹が頭を抱え込むので黄戒は異変を察し、肩を揺さぶる。蒼芹はそれで我に返った。

「あ……」

面を上げると、蒼芹の白皙はくせきはさらに真っ青になっていた。黄戒は慌てて控えていた老僕に伝え、翠緑玉を呼ばせる。老僕が伝える間もなく奥から翠緑玉が飛び出してきた。

「どうなさったの、旦那様っ」

妻に介抱され、蒼芹はやっと立ち上がる。

「……急に頭痛がしてな。すまない長慎、このまま休ませてもらうでもいいかな……」

「ああ、そうしたまえ。私のことは気にするな」

黄戒の言葉に甘えて、蒼芹は老僕の助けを借り、ふらつく体を引きずり寝室に向かった。

寢床に臥してからどれだけの時間が経っただろうか。黄戒と酒を酌み交わしたのは宵よいのことだ。窓に目を遣ると月明かりが射し込んでいる。夜半か。頭がまだ重い気がするが、それでも休んだおかげが大分すっきりした。思い切って体を起こす。蒼芹はホツとする。重いのは、やはり気のせいだった。吐き気をもよおすほどの血生臭さも、今は全くしない。心も落ち着きを取り戻している。

（何故、私は……）

あんなにも気分が悪くなったのだろうか。



翠緑玉に瓜二つの花魄がいる　それを、知らされただけで。

しかし、蒼芹にとってそれは初めて体験することではなかった。以前にも、似たような不快さを何度か感じたことがある。それは、失われた二十年前の記憶を取り戻すときの不快感と同じなのだ。

蒼芹は、二十年前の記憶が欠落している。当時彼は十五歳だったが、それ以前の全ての記憶を失ったわけではない。没落貴族であった蒼家の四男に生まれ、親兄弟を災害で失い、八つの年で祖父に引き取られ養育された。祖父には妾が何人かいて、うち一人は年が近く、よく可愛がってもらった。等の記憶はちゃんとある。欠落しているのは、ある事件の起こった前後五日間のことだ。記憶を失った間、たった一人の肉親であった祖父を、姉のように慕った妾達を失っていたらしい。どうして、何があつてそうなったのか、蒼芹にはさっぱり思い出せない。気が付いたら家族が皆消えてしまっていて、役人による事情聴取を受けた際、自分を除く家族が何らかの事件に巻き込まれて惨殺されたと言うことを、初めて知ったくらいだ。事実を知らされた蒼芹は精神的に混乱し、一時病院に入れられたほどだったのだが、それを引き取りに来たのが、幼い翠緑玉だった。翠緑玉とはその時に初めて出会ったはずなのだが、記憶の抜け落ちた五日間に面識があつたらしく、そして蒼芹の方も不思議と初めて会った気がしなかった。彼は翠緑玉の世話を受けることになった。その後も聴取や、事件の鍵を握るかもしれぬ蒼芹の記憶を取り戻すための治療などを受けさせられたが、蒼芹は何一つ思い出せず捜査も行き詰まってしまい、二十年経った今も一家に何があつたのか判らずじまいである。しかし蒼芹は翠緑玉の心尽くしの世話のおかげで心身共に快方に向かい、二人助け合つて暮らしていたのだが、心を決めて彼女に正式に結婚を申し込んだのは、事件から七年後、蒼芹二十二歳の年のことだった。翠緑玉は十五だったか。それから十三年。

（あれは、もう二十半ばになるのだな。童顔だから、いつまでも小娘のように見てしまう）

そんなことをぼんやり考えて、漸く<sup>やじや</sup>気持ちにゆとりが出てきたと知る。すると思は、よせばいいのに原因を探ろうとする。何故気分を悪くしたのか、何故事件は起きたのか、そう言えば黄戒はあの後どうしたのか……などと様々のことに思いを巡らせる。

（翠緑玉の姿をした花魄　花魄のように小さな翠緑玉……？）

結局何を考えても、そこに行き着く。

あの美しい妻が花魄のように小さくなったら　きっと自分は不躰<sup>ぶしつけ</sup>な視線を気にせず、具に眺めるだろう。等身大であれば、どんなに倦<sup>あ</sup>かず眺めていたいと思う夏野の瞳、触れたいと願う雪膚<sup>せつぷ</sup>や華奢<sup>きゃしゃ</sup>な四肢でも、その思いが邪であると畏れ躊躇<sup>ちゅうちう</sup>うのに。きっと何の遠慮もせず凝視するだろう。雪花を描いた時のように。

（いや、どうかな……。俺は、雪花ですら、描くには決心が要ったほどだ）

雪花よりも美しい妻が、雪花と同じサイズになったって、やつぱり自分は畏れるのではないか。でも、モノとして割り切ってしまうたら、自分は。

（愚かなことだ。翠緑玉をモノだなどと……）

危険な考えを掻き消すように、蒼芹は頭を振る。その時扉の軋<sup>きし</sup>む音がして、蒼芹は戸口に目を遣る。

「起きていて平気なのですか、旦那様」

翠緑玉が沐浴<sup>もくよく</sup>の道具を抱えて這入<sup>はい</sup>ってくるころだった。

「ああ、もう大丈夫だ。心配をかけたね。……長慎はどうした？」

「お一人で酒宴というわけにもいきませんし、残した肉をお土産<sup>みやげ</sup>に包んでお帰しました」

黄戒に悪いことをしたな、と思っっている間に、翠緑玉はてきぱきと沐浴の準備をして、気付くと蒼芹の服を脱がしにかかっていた。ハッとした彼は、「脱ぐくらいは自分で出来る」と、着衣に手をかける妻の手を解く。すると翠緑玉はしょんぼりと顔を俯かせてしまうので、蒼芹はうつと唸<sup>うな</sup>って、

「じゃあ、体を拭くのは、頼む」

赤くなつた顔を隠すように背中を見せると、よつぽど嬉しいのだらう、翠緑玉は飛びついて彼の体を拭い始めた。室内を照らすのが月明かりだけでよかった。燭が《しょく》あれば、きっと自分は理性を保てないだらう。背中から回される細腕を、身の内に湧く激しい情熱と共に絡み取っているだらうか。

（これでよく求婚など出来たものだ……）

蒼芹は、当時のことを思い出す。

当時から彼女は、蒼芹を「旦那様」と呼んでいた。それは夫という意味での敬称ではない。そも翠緑玉は、身寄りがないのを哀れんだ蒼芹の祖父によつて、奉公人として蒼家に招かれた婢女はしためなのだと、彼女自身の口から説明された。つまり主従の関係であつたのだが、子ども二人だけの暮らしは決して楽ではなく、その苦境の中で支え合つてきた彼らの間に主従を超える温かな感情が自然と育まれ、初めこそ兄妹の情に近かつたそれが成長による性の意識によつて、互いに異性として相手を思い遣る感情に変化したことは、ごく自然な流れ。陰陽の摂理と言えよう。二十二歳の蒼芹は画家を目指して師事を受けていた頃で、家庭を持つ生意氣が許される状況になかつた。しかし出逢つた時から美しかつた翠緑玉が、年を重ねて可憐さを増してゆくことに、蒼芹は焦らずにはいられなかつた。何しろ彼女は毎日のように男どもに言い寄られていたのだ。彼女の心が自分にあると感じてはいても、はつきり口に出して約束したわけでもなかつたから、蒼芹は毎日毎日不安だつた。けれど彼は恋愛に奥手であつたから、なかなか気持ち打ち明けられなかつた。翠緑玉としても、主従である手前彼女の方からは言い出せなかつただらう。蒼芹から行動に移すしかないと解つていても、意気地のない彼はいつ告白しようかと思うばかりで堂々巡り、とても決行など出来なかつた。

そして蒼芹は逸はやつた。そのことは夫婦になつた今尚後悔される。今日のような明月の夜のこと、空を見上げていた翠緑玉が年のわりにあまりにも艶なまめかしく映り、蒼芹は激情に堪えきれず、その繊細

な体を両腕の中に閉じ込めてしまった。最も卑怯な手を使ってしまったと思つた。真摯な気持ちであつたなら、先ずは心を伝えるのが先だろうに、順序を違えてしまった。冷静であれば、途中で止めて詫びることも出来た。しかしそれには蒼芹は若すぎたし、何より抵抗一つせずには体を開いた彼女の、恍惚の表情　蒼芹に身を委せる喜びの笑みが、彼の激情に拍車を掛けた。口に出来なかつた想いを、睦言に乗せて何度も囁いた。欲望に任せての告白は生真面目な彼にとつて憎むべき行いであつたが、どうすることも出来なかつた。翠緑玉の体はとても温かで、真心とも黒々とした欲望ともつかぬ感情を嬉々として受け入れる彼女に、蒼芹は許されたような気がして全身全霊で思ひの丈をぶつけた。逆にこうでもしなければ、ずっと主従の関係を絶てなかつたかも知れない。しかし、それに易々と甘えていられる蒼芹ではなかつたので、翠緑玉を愛することへ一層の責任を己に課したのだつた。亭主関白な風潮にあつて蒼芹の妻に対する思い遣りは珍しいものだ他人には言われるが、それは彼が妻に甘いのは卑怯な手段を使って己のものにしたという負い目がある故だ。そしてそれは、未だに気安く妻に触れられない要因ともなっている。

（単に意気地がないだけ、とも言える）

蒼芹が思わず自嘲の笑みを零すと、「何を笑っているの？」と妻が反応する。

「ん……、いや、別に」

周章して真下に回つた翠緑玉の直視を避けようとすると、すかさず手を伸ばしてきて、

「妾の目をちゃんと見て、旦那様」

真摯な目で訴えてくる。蒼芹は囚われたように、恐る恐る視線を戻す。新緑を思わせる虹彩で見詰めてくる。熱を孕んでいるように見えるのは、気のせいではないだろう。

「ね……、今日はなんだか、あの日のようね」

その言葉が証明ではないか。翠緑玉は誘っているのだ。

「また、聞きたいの。ね、いけませんか……？」

蒼芹は翠緑玉を抱き締め、耳元に囁いてやる。

「……好きだ、翠緑玉」

久しぶりに掻き抱く体は、優しい熱を帯びていた。

＊

美しいものに貪欲になるのは、人であるが故……。

誰かの言葉だが、誰の発したものだっただろう？

しかし、爾来蒼芹の心に根を張るように留まっている言葉である。矢張り翠緑玉は、生身であるからこそその翠緑玉である。白氏の花魄がいかに翠緑玉に瓜二つであろうと、そしてそのことがどんなに自分を誘惑しようと、蒼芹は依頼を断るべきだと思った。が、断るつもりで黄戒の勤める出版社に出向いた蒼芹は、思いがけず白氏と出会う。

「蒼先生がやる気になって下さって、私は嬉しいです！」

会うなり勘違いされ、蒼芹はたじろぐ。

白氏……白来光は蒼芹より一回り年下で、美女と見紛う容貌には同じ男でも身に疚しさを覚えてしまう。その麗人に両手を握られ、熱視線をぶつけられ、意気揚々と、

「これで小憎らしい華氏の鼻を明かせるというもの……いや、先生の絶技をお見せ戴けるだけでも有難いというもの！ その筆で描かれた私の花魄は、必ず雪花を凌ぐでしょう！ ねっ、先生！ そうでしょう？」

息も継がぬ勢いで言われては、断る口も挟めぬではないか。隣の黄戒をチラリと窺うと、「今更俺にはどうにも出来ぬ」と書かれた額に大粒の汗を浮かべている。あてにならんと早々に諦め、蒼芹は自分から断ることにする。

「白公子には申し訳ありませんが、私はこのお話を辞退したい」

白来光はきよんとしてから、訝しげな表情に変えて蒼芹を見詰

める。

「え。それは……あの蒼子環しかんの孫とは思えぬ発言ですね」

祖父の名を出され、蒼芹は眉を微かに顰ひそめる。

「蒼子環殿は周囲も呆れるほど美術品に目がなく、そして誰よりも執着心の強い方として、蒐集家間だけでなく、下々にも有名なお方だったのですよ。そのことは貴男がよくご存じだと思いますが……」

そう……だったろうか？ 貧しい暮らしの中、そんな美術品など見た覚えがない。それとも、蒼芹には知らされていない、美術品を収めた倉などがあったのだろうか。しかし祖父は、貧しい中にあつても妾を何人が囲うほどだったから、事実蓄えはあつたのかも知れない。或いは、自分は忘れているのかも知れぬ。

「白公子、蒼先生は幼少時の記憶に多少混乱こんらんがありなのです」

黄戒がフオローすると、白来光は「ああ」と相槌あいづちを打つ。

「知っておりますよ、過去の悲しい事件ですね。蒼先生はかなりご苦労なさったとか 察しますよ」

「はあ、どうも……」

「しかし先生。雪花は描いて私の花魄かふくは見もせず描きたくないなどと、私が納得すると思いですか？ いや、たとえどんな理由があつたとしても、貴男に描いて頂かないとこちらも困るのです。貴男にだって、祖父殿譲りの執着心しやくしんがおりでしょうに」

いちいち祖父を引き合いに出す白来光が煩わづわしく、つい声音こゑがきつくなる。

「私は祖父のそんな一面、覚えちゃいませんよ！ 第一、何だつてこの三流画家さんりゅうがに拘こだめるのです？ 腕の良い画家は他に沢山居るはずだ」

「謙遜なさる。しかし、あの雪花を見て、貴男を三流と評する者は最早居ないのですよ。そして、私の花魄を描くのは雪花を描いた貴男以外に有り得ない」

白哲に妖艶な笑みを浮かべて言う。眼光に凄みさえある。しかし、蒼芹は怯ひるまない。

「あの雪花の絵をそう見るのか。あれは駄作だ、失敗作だ。過大評

価をなさる貴男の目は、つまりはその程度と言うわけだ。それでは、貴男の花魄も大したことはなさそうだな」

「では、貴男は失敗作だと言う雪花の絵を何故破り捨てなかったのです？ 失敗作と判っていて依頼主に提出するのは画家としてのプライドが許さぬものではありませんか？ 貴族への当て付けにしても、貴男がその自負を捨てるとは思えません。ましてあの雪花を見れば…… 貴男は、捨てられなかったのでしょうか？」

蒼芹は、何も言い返せなかった。 凶星であるのだ。

そう、蒼芹は、雪花の絵に不満を抱いても、終ぞ破り捨てることが出来なかったのは、無心を努めたにも関わらず彼の暗部を無意識に塗り込めていたようで、しかし、その闇を認めたくないが、心のどこかで解ってくれる人には許されるのではないかという甘えが、少なからずあったからだ。翠緑玉が許してくれたように。

「……そう、あれは、私の腕が、心が未熟であることを証明した絵に過ぎない。だから厭うのだし、しかし捨てすることも出来なかったのです。私に未練があったからなのでしょう。が、貴男はそんな中途半端な作品をご所望なのか？ それで満足なさるのか？」

いつの間にか贖罪を請う罪人のような目で蒼芹は白来光を見ていた。すると白来光は、天女の降臨かと錯覚させる媚笑を浮かべ、蒼芹の手を取り直すと、

「貴男の感情が生々しく映し出されているからこそ私は魅力を感じるのです。雪花の絵は羨ましい。だから私は三倍の値を出して、さらに美しい花魄を手に入れた。貴男に描いて頂きたいからです。貴男は貪欲さで名高い祖父殿に、輪を掛けて貪欲な人だ。兎に角私の花魄を見て頂きたい。貴男があれを見て、どんな欲望を見せてくれるのか楽しみだ」

そして耳元すれすれにまで唇を寄せ、彼は続ける。

「美しいものに貪欲になるのは、人であるが故　そう、故人も言を遣したものです」

蒼芹は素早く体を離し、瞠目して白来光を見据えた。依然、貴公

子は嫣然と笑んでいる。

「誰の言葉だ……それは」

震える蒼芹に、白来光はクスツと笑い声を洩らす。

「祖父殿の座右の銘ではないですか……蒼先生。うふふふ」

また、頭痛が襲ってきた。蒼芹は遠退く意識の中に、翠緑玉の笑顔を見た。

気が付いたとき、見覚えのない天井が視界を占め、蒼芹は飛び起きた。設えの良い内装に調度、体を包む羽毛布団の煌びやかな刺繍寒生の蒼芹には身の毛立つほど過ぎた豪奢ぶりが目につき、気が付くと絹の衣まで着せられている。覚った蒼芹は慌てて紐を解く。  
(道楽貴族が　ッ！　私を拉致するほどかッ)

上半身裸になったところで、白来光が喜色満面の笑みを湛えて室に這入ってきた。

「先生、お目覚めでしたか」

「私を掠っておきながら、ぬ、ぬけぬけと……」

怒り心頭の蒼芹を、白来光は哀れんだ目で見詰める。

「お倒れになったから介抱して差し上げたのですよ。ぬけぬけとは非道い仰りようだ」

「では元通り恢復しましたので、家に帰らせて頂きます」

裸のまま出て行こうとすると、白来光がさつと遮る。

「いけずですね、先生。先生は、一度は私に心を開いて下さったのに……」

美麗な青年に、まるで恋人を追うような目で見上げられ、蒼芹はぞつとする。此処にいと、自分はこの青年に食われてしまうのではなからうか。

「私にそんな趣味はありませんから安心して。それに黄氏の了承も得ています」

そう言われても、ちっとも安心出来ない。蒼芹はなるべく彼から距離を取る。



「……そうまでして描かせたいか。私の醜い感情を、晒させたいのか　貴男は」

壁際に後退る蒼芹を見て、白来光は苦笑する。

「美醜とは表裏一体、それぞれがあるから成り立つ。美女には棘が孕むように、醜女に優しい心があるように。貴男はそれを知れる立場にあつて気が付かないとは。でも、知らぬままに絵筆に走らせることが出来る貴男は……矢張り天才なのでしょう」

パンと手を叩き、外に控えていた小間使いを呼ぶと、白来光は命じて、

「蒼先生のお着替えを手伝って差し上げなさい。終えたら、温室にお連れせよ」

白来光が去ると、小間使いは蒼芹の体に手を差し向ける。年頃の少女に体を触れさせるのは抵抗があるので着替えを奪うと、ふと自宅の香りを感じた。翠緑玉が好んで焚く香の香り。よく見れば、それは蒼芹の衣服だった。倒れる前に着ていた物とは違う。

（翠緑玉が来たのか？）

蒼芹は手早く着替えを済ませ、案内を請うた。

華邸のものとは比べものにならぬ広さを誇る温室は、まるで外の風景を建物の形に合わせてくり抜いてきたようで、植物の他小鳥や色とりどりの虫まで飛んでいる。だが、

（描かせる環境まで張り合うか……。此奴、思った以上に豎子ガキだな）  
最早呆れを通り越している。

主は中央の亭でのうのうと茶を注いでいる。その傍らに　思った通り、鳥籠がある。その中に、翠緑玉に瓜二つの花魄を閉じ込めているのかと思うと、反吐へどが出そうになる。

「先生。そう怖い顔をなさらないで。まあ、掛けて下さいよ」

「ふん」

蒼芹は悪態を吐きながらも、勧めの通り彼の向かいに腰掛ける。  
「良いお茶を頂きました。これを飲むと、貴男はよく落ち着かれる

のだそうですね」

すつと茶杯を差し出され、その嗅ぎ慣れた香りに、蒼芹は一瞬固まってしまう。

「愚妻が……此方を訪ねましたか？」

強張った声で問えば、白来光はけろつとして、

「貴男が創作に励まれると長慎殿からお聞きになつて、差し入れにいらつしゃいましたよ」

「あ……会つたのか、あれに」

白来光はにこにこ笑つて応える。

「先生が私の花魄を描くことに何故抵抗を覚えるのか、少しだけ解つたような気がします」

体中の血の気が引くのを感じる。鳥籠の中にいるのは、むしろ自分の方ではないか。

「さあ、では先生、ご覧下さい。これが私の花魄です」

鳥籠を開け放ち、その掌に花魄を載せて、白来光は蒼芹に差し出した。

花魄は白い牡丹ぼたんの花弁のようなドレスを着せられ、足よりも長い緑の髪　黒髪の美称ではなく実際に濃い緑色をして、光に当たると染めた絹糸のように、一本一本がきらきらと輝いて木漏れ陽を彷彿ふつとさせる。しかし……繊細すぎる体は目に見えて判るほど小刻みに震えていて、あまりにも頼りない。だが、それでも、

（見たい）

俯いて肩に掛かる髪を、どうにか指で傷つけぬように慎重に払つて、

（見たい、見たい）

ああ、でも指が震えて、掬すくった髪がさらりと落ちる。

（見たい、見たい、見たい、見たい）

蒼芹は髪を束にして摘み上げていた。そして、露わになる、白い膚。

エメラルド

翠緑の瞳が綺麗だから、翠緑玉と名付けよう。

そうされると嬉しいの。それが全てなの。

驚いた。

一瞬、翠緑玉が其処に居るのかと思うほどだった。よく似ているが、

（瞳の、色が違う）

顔を近づけて、再度その極小の双眸を覗き込んで確かめるが、蒼<sup>あお</sup>いのだ。顔は本当に瓜二つだが、彼の惹かれてやまぬ夏野の瞳ではない。

だが、もう蒼芹は冷静ではなかった。取り憑かれたような目をして両手に花魄を載せ、全体を舐め回すように見始める。

（翠緑玉が花魄であつたら、翠緑玉が花魄であつたら）

その熱心な様子に、白来光は満足そうに頷いて、静かにその場を去った。

瞳の色が違うだけでこうも印象が変わるか。同じ顔なのに別人のようだ。蒼い瞳は冷たい水底を思わせ、情緒豊かな翠緑玉に対しこちらは表情が憂い顔一つと乏しく<sup>とほ</sup>、生きているのか、死んでいるのか。その曖昧さが、蒼芹の目を釘付けにする。蒼芹は花魄を掌の上に転がし、ルーペまで持ち出しての観察に明け暮れていた。もう一週間になるだろうか。翠緑玉のことは、こんなにも見詰めたことなど無かつたはずだ。蒼芹は、彼女に対しては兎に角意気地に欠け、大切に想えば想うほど見詰められない。直視の難い無垢<sup>むく</sup>な美貌が、蒼芹の疚しさをはね除ける。でも、生身の彼女ならば、蒼芹が望めばいくらでも要求に応えるだろう。たとえば、この花魄のドレスを指先で抓<sup>つま</sup>んでその内部までを具<sup>ついで</sup>に覗いても、彼女は怒らないだろう。無表情のまま、されるがままに？

ふと、彼女の恍惚の表情が脳裏に浮かぶ。触れられて、喜ぶ顔。しかし、この花魄にはそれがない。こんな屈辱<sup>くじやく</sup>的な行為を受けても

否、花魄にはそうした羞じらいなど初めから無いのだろうか。  
こんな、乱暴されて心を喪失したような表情。

（俺は……こんな、女を犯すような真似を　いくらモノと割り切っているからと言って、興味本位だけで、こんな、ここまで　！）  
急激に興奮が冷めて、蒼芹は花魄を鳥籠に戻した。

自分に失望する。

（しかし、依頼主はそんな俺の、剥き出しの劣情を見たいと仰る。  
応えねば、私は翠緑玉の許にも帰れぬ……っ）

ガシャン！　と鳥籠を叩く。が、花魄は驚きもしないし泣きもしない。

「青玉と名付けました」

夕餉の席、白来光が得意げに言うので、解りきつてはいたが由来を聞くと、

「先生に倣いました。先生は宝石の名を付けたのでしょうか？」

蒼芹は箸を置いた。

「何故、そのように怖い顔をなさるのです？」

何故だか、問われた自分でも解せぬ。蒼芹には答えられなかった。

「先生、観察はもうよろしいのですか？」

鳥籠から青玉を出そうとしなくなつて数日が経ち、白来光は心配になつたのか。

「もう十分だ。変に食い入るように見て、俺は自分が変態になつたかと、気が狂れそうだ！」

蒼芹が荒っぽくイーゼルを設置するのを見て、「いよいよ描いて下さるんですね！」と、青年は目を輝かせる。

「期待しているところ申し訳ないが、私は作業を見られるのが大嫌いなんだ。出て行ってもらいたいものだな」

最早貴族であるからと言って、媚びへつらいもない態度で接するのは、幽閉されて一月、ずっと翠緑玉に会えぬ所為だ。白来光も彼

の不満を判っていて、「青玉を慰みものにすればよろしかろう」などと、答える。天人を思わせる笑みには鬼畜さながらの非道さが隠れていた。それを最近知って、蒼芹の方も人とは思わなくなっている。

「お前さんは花魄の鳴き声を聞いたことがあるかね？　この子が鳴かないのは、飼い主のあんたに愛情の欠片かけらもないからではないのかね！」

蒼芹の非難に、白来光はわざとらしく目を見開かせている。

「先生こそ、青玉の下着なんか覗いちゃって、いやらしいったらありやあしない。青玉の声を、聞いたことがあると言うのですか？」

「あるさっ！　それはもう痺しびれるほどの善よがり声だ！」

ムキになって肯定したが……花魄の鳴き声って、小鳥の囀りではなかったか？

「奥方の嬌声と混同されているようですね」

さらりと言われて、蒼芹は顔を真っ赤に染める。

「今更ではありませんか」

白来光はそつと蒼芹の背後に忍び寄り、その肩を抱いて言った。

「先生。もう、私と先生の仲です。恐らく先生の邪心を絵から読み取ったのは、この世で私だけ。先生の気持ちを解ってあげられるのは私だけ、と言うことです。正直ね、華氏との張り合いなんて、もうどうだっていいのです。貴男の、その初心うぶな想いに包み隠された最も醜くて最も美しい心の原石を、私は暴きたいのです。ねえ、先生」

「暴く、か……。そんなことも、貴族は愉しいのかね。他人の心をもてあそぶのが」

だったら望み通り描いてやる。そして幻滅させてやる。

蒼芹は怒り狂ったように、木炭をカンバスに走らせた。

檻おりに絡まる青玉のしなやかな四肢、

蒼芹の手首よりもずっと細い胴、

白い膚に巻き付く緑の髪、そこから覗く虚ろな紺碧こんぺきの双眸。

艶めかしく、絶望的に、しどけなく、退廃的に。

これが望みだと叫ぶように、蒼芹は描き殴る。

俺が翠緑玉に望むこと、翠緑玉に抱いている感情。  
これが。

白来光は、しかし哀しげな表情で蒼芹を見ていた。どうだ、こういうのが良いのだろう、と思つて、振り返つてみたらそんな面だ。蒼芹の手の中から木炭がこぼれた。磨り減つて、もう指の爪の大きさくらいしかない欠片は、床をころころと転がってやがて行方を眩ませた。

違う、と言うのか……。

「先生。私は、青玉にこの名を与えるとき、それはもう想いを込めてつけたつもりです」

カンバスを切り裂き、切り裂いて切り裂いて粉微塵こなみじんにして、そうして頂垂つなだれてしまった蒼芹の背を、白来光は優しく擦さする。

「……私に、倣なまったと言つた……」

「倣なまいましたよ。倣なまつたのです」

蒼芹はよろよると顔を上げた。精神的に竄やっれきつている目で、白来光を見据えた。

「貴男は何故、それを知っているのです」

「奥方に聞きました」

翠緑玉に、か？ 蒼芹は動揺する。

「先生が畏れているのは、奥方の美貌ではありませんよ。安心なさい」

医者のような口を訊く。蒼芹は苛立つて、  
「知っている！ 私が怖ろしいのは、自分の心だ！」

叫んで、頭痛に襲われた。最近、こと多い……。

「旦那様」

頭上に現れたのは見知つた天井だった。そして、愛妻の声に、蒼

芹は跳ね起きた。

「翠！」

蒼芹は翠緑玉の体にしがみついた。すると翠緑玉は頬を桃色に染めて、

「まあまあ、旦那様ったら。長慎様がお見舞いに来ている前で、まるで子どものようね」

えっ、と声を上げて振り向くと、几に気まずそうにして腰掛ける黄戒の姿があった。

「や、季献。その……見せつけてくれるほど恢復して良かったなあ」二人の顔を久々に見て、緊張が解けた。人前で妻に抱きついて羞じらいもせず、それをからかう友人に言い返すことも出来ぬほど、心の底からホッとした。

白来光は蒼芹を邸に閉じ込めて絵を描かせようとしたのだが、蒼芹が精神的に塞いでしまったので休養が必要だと感じたらしい。倒れた蒼芹を一度帰宅させたのだった。

その夜は翠緑玉と共に久しぶりに同衾どうきんした。翠緑玉の温かさに甘えたかったのだが、そのうち犯した青玉と翠緑玉の違いを探っている自分に気が付いて、蒼芹はそれ以上事を進めることが出来なかった。夫の愛撫あいぶが止んで、翠緑玉はそっと起き上がり彼の体に触れるいたわ労りに満ちた感触が、蒼芹の心をいくらか慰めた。

「旦那様、また花魄をお描きになっているのですってね」

蒼芹は驚愕きょうがくして、怯えた子犬のような目で翠緑玉を見る。

「な、何だよ。まさかお前、また描いてくれと、言うのではないよな？」

そんな蒼芹を、翠緑玉は涙目で見詰める。

「妾が愚かでした。御免なさい、御免なさい。ただ嫉妬しただけなの。貴男が妾以外の娘を見詰めるのが……描いてくれなくていいの。ただ見詰めてもらいたかったの。思い出してもらいたかったの」

夏野の瞳から大粒の涙が零れて、蒼芹は正氣に戻る。戻って、訳

も分からぬ様子で泣く妻を抱き締めると、小さな肩は夜気に晒されすっかり冷えていた。蒼芹は、今度は自分が彼女を労って、その肩を擦ってやる。

「どうした、何故泣く。私は、お前を責めるつもりなんて無かった。泣くな、翠。泣くな」

翠緑玉は夫の優しさに触れて、さらに涙する。

「御免なさい、御免なさい。過ぎた我が儘を許して。傍に居させて

」

蒼芹は、何故彼女が謝って、泣くのが解らなかった。

しかし、蒼芹は直ぐに知ることとなる。

忌まわしい事件の顛末と、翠緑玉に秘められた謎と共に、その理由を暴くことになる。

\*

「先生は、どうしたら現代で花魄を作り出せると思いますか？」

「さあな」

蒼芹は、あんな目に遭ったというのにまた白来光の許を訪れている。ただし幽閉は勘弁と、自宅からの通いを約束させた。白来光も少しは悪いと思っていたようで、

「もう幽閉は止めにします」と諦めてくれた。

何故また戻ってきたのか。それは、青玉のことが気がかりだったからだ。結局蒼芹は、青玉にモノとして以上の情を抱いていて見ていることになる。雪花よりもその気持ちが強まったのは、青玉の顔が翠緑玉に似ていることが大きい。

絵も描き直している。が、青玉をモデルにしているわけではない。蒼芹の心の闇は、詰まるところ翠緑玉を端に発生しているのだ。妻を大事に想う気持ちが強すぎて、気持ちがあっても描けないのなら、蒼芹は離れて描けばいいと思いついた。ころころとプリズムのように変化する翠緑玉の、その表情一つ一つを思い出してカンバスに描



いてゆく。青玉には、傍らでその姿を見せた。すると、最近は表情に変化が見られるようになった。憂い顔一つしか感情のない青玉が、微かに口許を弛ませるようになったのだ。喜んだのは蒼芹ばかりではない。所有者である白来光も無邪気に喜んでいた。

「私はこれでも花魄について色々と研究したのです。絶望の世だった乱世から数百年……今ではその辺で首を吊るのも、ましてや同じ木に三人が首を吊る確立なんて低すぎます」

「じゃあその確立を上げたらどうだ。ここは自殺の名所です、とても呼び込めば自殺志願者は……寄らないか」

「寄らないです」

白来光との会話はトラウマが残るが、しかし失った記憶を取り戻せそうな気がしてつい話に乗せられる。本当は記憶が戻ることを望んでなどいない。それは、愛する翠緑玉が嫌がっているので余計にそう思う。しかし、どうも最近彼女が落ち込んだ様子なのは、その失われた記憶に何か関与がある気がして、記憶を取り戻す切っ掛けになればと、怖いもの見たさの心境で白来光の下世話なお喋りに付き合っていた。しかしこの白来光、まるで女のように喋る喋る。貴族というのは、よほどすることがないのか？ それに不真面目に調子を合わせるのもけっこう辛いところがある。

「仮説を立ててみたのです。花魄がどのようにして生じるのか」

「同じ木に首吊り三回がルールだろう？ その死者達の怨念が、花魄を生むのだろう？」

適当に聞き流していた蒼芹の耳が留まる。この話、関連がある。

そう直感した。蒼芹はカンバスに向かわせていた体を、白来光に向ける。

「首吊りでなくても、いいことにしてみましよう」

「はあ？」

白来光は床榻に優雅に腰掛け、茶を啜りながら得意の壮絶な笑みを浮かべる。

「木に、血を浴びせるのです」

美が孕む棘　いつか自身が言ったことを、体現する類笑み。はつきり言つて、怖い。

「人殺しを見るような目はお止めなさい。それに、考えたのは私が最初じゃないですよ」

「え？」

白来光はその蠱惑的な笑みのまま床榻から立ち上がって、蒼芹の方に寄つていく。

「先生は、覚えが本当にはないのですか？」

額に手を当てて、可哀相にと呟きながら撫でてくるので、蒼芹はそれを弾く。

「口ぶりからして、それは二十年前の事件が関与しているのだろうが　まったく、君はどうやって私のことを調べたのか、つくづく感心させられるが、本当に全く覚えが無い」

記憶を失つた間に起こつた家族の惨殺事件、翠緑玉との出逢い役人にも明かせなかつた闇の真相をどう思いついたのか。彼は言わないが、知っていると思えぬ口ぶりだ。

「いつそ全て明かしたらどうだ？　それとも、真実は私が惨殺の真犯人で、それを知つた私が傷つくのを気遣つて明かさないのでしたら、それは不快で余計な気遣いと言えるぞ」

そう言つと、白来光は、

「それを奥方にも、果たして同じように言えるのでしょうか　先生？」

挑むように、天人の媚笑。これには、流石に覚悟をしていた蒼芹も震えを止められない。

（翠緑玉が、関わりあるのか。矢張り）

「……仮定の続きを？」

白来光が応答を求めている。蒼芹は頷く。

「つまりね、一本の木に何らかの形で三人以上の贅の怨みを与えてやればいいのです。花魄は怨みを糧に咲く花のようなもの。その手段は、何も首吊りのみに拘ることはない。例えば、斬り殺した勢い

で返り血を浴びせたり、殺した後で生き血を搾り取って肥やしとして与えてみたり　これはむしろ殺された者の怨みも一層強まってより美しい花へとその怨みを昇華させるのではないでしょうか」  
涼しい面で、実に涼しげに言う。こちらを見て「仮定です」などと笑顔で念を押す。

「もしそこまでの執着心があったとして、花魄と言うのは必ずしも美しいだけの存在ではないのだろうか？　その鳴き声で怨みの相手を祟り殺すとか、どうせそう言う裏があるのだろうか。そのリスクを負ってまで花魄を欲する心が、まずまともではない。現実的ではない！」

反論すると、白来光は「そうでしょうね」と、意外やすんなり同意する。

「でも、貴男の祖父殿は、違った」

「な、何？」

蒼芹を、またも頭痛が襲う。しかしここで倒れるわけにはいかない。蒼芹は気を確かに保とうと頭痛に耐える。

「殺されたのは祖父殿と、彼の妾三人です。三人の妾はいずれも殺害方法が同じでした。鋭利な刃物による斬殺です。しかし祖父殿だけ違ったのです」

「違った？　殺され方が違うのか……？」

まただ。また、記憶の断片が頭の中を過ぎってゆく。血の臭いと共に。

「違うのです。彼だけは死因不明でした。まるで呪いでも受けたようだと、近隣の住民達は証言していました。当時の捜査記録に残っているそうです」

呪い　三人の妾達の？

「また、殺害場所も同じでした。祖父殿の家　貴男が幼少期を過ごされた邸には、木蘭の木があったそうですね。娘達はいずれもその根元に倒れていました。祖父殿は少し離れた、矢張り木の下です。木は娘の返り血を、幹が赤く染まるほどに浴びていた。そこで先程

の仮説です。斬殺された娘三人の血を養分に、花魄が生まれたのではないのでしょうか。貴男の御祖父様は花魄に拘っておいでだった。しかし、花魄は今の世簡単には入手できません。まして寒門にあった蒼家では、それも叶わなかったでしょう」

「ば、馬鹿な。祖父が花魄への執着に駆られ、三人の妾を殺害したと言っのか？」

「殺害状況、その動機、そして加害者の不審な死　それらを考えると、そのように繋がりませんか？　それも自然に、すんなりと……落ち着くべきところに落ち着くように」

蒼芹は椅子から立ち上がる。

「憶測でものを言いますな。証拠が残っているのですか！　もしそうなら、何故私は生き残っている？　花魄の呪いを、受けずに、何故」

「生き残りである先生の証言があれば、事件は迷宮入りすることもなかったのだと思いますよ。貴男は証人であり、そして多分貴男が証拠の一つだとも考えられます」

「わ、私が証拠……？」

「先生は祖父殿の影響で美術の道に進まれたのでしょうか？　ご近所の方々曰く、蒼家には没落以前の繁栄を偲ばせる家財が僅かに残っていたと。それは美術品だったり、骨董品だったり……そういうものを収めた倉があったそうですよ。貴男はそうしたものに幼い頃から触れてきて、影響を受けてきたのですねえ」

（あ、あったのか。そんな倉が　　）

それは事件の起きる以前から在るはずだろうに、蒼芹は全く覚えていなかった。

美しいものに貪欲になるのは、人であるが故。芹や、その美しいものを追及する道を選ぶのなら、もっと貪欲にならねばならぬ。美しいものに、触れねばならぬよ。

「あ」

急に、耳に聞こえる声。これは、祖父の声、祖父の口癖　だつたように思う。

何かを思い出している様子の蒼芹に、白来光は顔を輝かせて問う。  
「何か思い出したのですか？」

蒼芹はハツとして、

「いや……。しかし公子。貴男の推論だと、花魄は何処に行つてしまふのです？」

白来光は形良く、赤い唇に指を添える。不気味に歪むのを隠すように。

「実のところ、私が気になっているのはそこなのです」

今度は鳥籠の青玉に近づいて、隙間から指を差し込んで戯れ出す。青玉は愛らしく「チチチ」と小さく囁く。蒼芹は目を<sup>みは</sup>瞪る。青玉が鳴くのは初めて聞いた。実はかなり白来光に懐いているのではないか。すると白来光は、蒼芹が目を丸くしているのを見て寂しげに頬笑んだ。

「私は、先生が羨ましいですよ」

「え？」

「いえ、何でも。それで、その花魄がどこに行つたか……それは先生の忘却した記憶に、鍵があるのだと思いますよ」

\*

後日蒼芹は白来光の勧めで、幼少期を過ごした祖父の邸跡を訪ねた。直に現場にゆけば、何か思い出すかも知れないと考えたのだ。それには翠緑玉も同行した。このひと月頻繁<sup>ひんぱん</sup>に起こるようになった頭痛と、体の不調を案じてのことだった。

二十年ぶりに訪れる邸跡は外観を保つのみ　と言っても手入れもされていないから、土壁はすっかり風化して今にも崩れそうである。邸内に這入るのは危険と判断し、周囲をぐるりと回ることにし

た。

「記憶の無い五日間　俺はその間にお前に逢ったのだったな」

蒼芹の数歩後ろをついてくる翠緑玉に訊ねると、小さな声で「ええ」と返事が返る。

それきりお互いに無言になり、無言のまま歩いていると、やがて庭であつたらしい、雑草が思い思いに生い茂る場所に出た。そこには枯れた木が、ぽつんと寂しげに立っている。

「ああ覚えがある。これは木蘭の木だ。二十年経って、すっかり哀しい風情になったなあ」

蒼芹は懐かしげに見上げていると、翠緑玉が駆け寄ってその幹に抱きついた。蒼芹はぎよつとする。妻は泣いていた。脳裏に、赤い蕾をつけた木蘭の木のイメージが浮かんで、蒼芹は立ち眩みを起す。

「旦那様っ」

翠緑玉が慌てて駆け戻り、体を支えてくれたので、蒼芹は倒れずに済んだ。石造りの亭が近くにあつたので、そこで休むことにした。「……すまないね。でも、何か思い出せそうなのだ」

そう告げると、翠緑玉は夏野の瞳をいっぱいにかかせて、驚いているようだ。

「旦那様はこれまで思い出そうとする度に心身共に傷ついてこられました。そんな無理をしてまで、思い出さなくてもいいじゃないかって、忘れることにしたんじゃないの？」

涙ぐむ翠緑玉の頭を撫でて、慰める。

「お前はそれを望んでいるような気がするよ」

夫の慈愛に満ちた笑顔に、翠緑玉は凍り付いたように固まる。「いいんだ。私も思い出したい……何もかも」

気分が落ち着いてきたので、蒼芹は白来光が自分に語った事件裏の仮定を、同じように翠緑玉に聞かせた。翠緑玉は顔を青ざめさせて押し黙る。

（彼の仮定は、大筋で当たっているようだ）

翠緑玉の様子を見れば、認めねばならない。蒼芹は再び木蘭の枯れ木を見る。周囲の木とは明らかに雰囲気の違い。白来光の仮定に言う、斬殺現場にあった木……なのだろう。ここで、祖父は妾を次々に殺していったのか。

「花魄は、自殺した死者の怨念が凝固したものと言いますが、少し違います」

唐突に、翠緑玉が語り出す。

「恨む相手を取り殺したりはしません。唯々純粹すぎるとも言えるこの世への絶望の念が、美しく凝る……それだけなのです」

まるで懺悔ざんげの口調ではないか。蒼芹は、翠緑玉が怖ろしい事実を語ろうとしているのではないかと感じた。全てが壊れてしまうような恐怖を体の芯から感じるのに、耳は一句一言聞き逃すまいと、全身の神経総動員で注意を向けている。

「子環おじさま様の死因は、心臓発作です」

「え」

蒼芹は思わず間の抜けた声を上げる。それも仕方がない。その裏に、おぞましい事実が隠されているのだと思っ  
て緊張をしていたのに、ただの病気では拍子抜けもする。

「老いが心臓を弱らせていて、お医者様から興奮してはならぬと注意されていたそうです」

坊、お祖父さんに無理をさせてはいけないよ。

はい、せんせい。ぼく、きつときをつけるよ。

幼い頃、医師とそんなやりとりでもしたか、おぼろげ臍氣に蘇る記憶の中、確かに祖父はどこか患っていたように思う。

「妾を手にかけたことで、興奮し……そのために発作を起こしたのか？　しかし真実祖父が花魄に拘っていて、罪を負ってでも手に入れたと考えたとき……自分の心臓が弱っていることを考えないだろうか？　欲したところで自分が死んでは元も子もあるまい」

「花魄の生まれる瞬間を、よっぽど見たかったのでしょう」

現れたのは白来光だった。

「こ、公子。貴男まで来たのか」

派手な紅い綾衣あやぎぬに身を包む白来光は、蒼芹を見てにつこりと頬笑む。

「青玉も連れてきました」

懷から、子猫のように抱かれた愛らしい青玉の笑顔が現れる。

「……ずいぶん表情が出るようになりましたね」

青玉の笑みがだんだん人間らしくなっていることに、蒼芹は感心せずにいられない。

「花魄というのは、接し方次第で感情豊かになるものようです」

白来光はそう言い置き、意味ありげに翠緑玉を見る。

「白公子。私は貴男を許す気にはなれませんよ」

翠緑玉は、普段からは想像もつかぬほどの感情を殺した表情をし、それまでに聞いたこともないほど冷たい声を発するので、蒼芹はぎよつとして振り返る。それに、今の言葉の意味を理解しかねる。

何だ？ 何を許さないって？

慌てて、今度は白来光を見ると、彼は苦笑して、

「奥方は、私が先生を掠い、一月も幽閉したことを怒っていらつしやる」と言つ。

「それだけではありません。貴男は自分の欲を追求して旦那様を追いつめました。そのせいで、旦那様はこんなところに戻ってきてしまったんじゃないの。そんな花魄まで手に入れておいて、それでも飽きたらずに、貴男は見に来たのでしょうか？ 子環様が作り出した花魄を」

翠緑玉は、何を言っているのだ？

「それは貴女が望んだことでもあるでしょう？ 貴女は自分の幸福が崩れてしまっても、そのことを願った 違いますか？」

白来光の言葉に翠緑玉が絶句してしまったので、蒼芹はすかさず割って入る。

「待ってくれ、二人とも何を言っているのだ？ 説明をしてくれな  
いか」



「旦那様。この人が旦那様に接触をしてきたのは、絵を描かせたいからではありません」

「何だつて？」

「この人は、子環様が作り出した花魄が見たくて、旦那様の欠落した記憶を思い出させようとしていたのです」

妻の言葉に蒼芹は混乱する。花魄に執着を示していた祖父。彼は花魄を作り出すためにわざわざ妾を囲い、そして殺した。結果生まれたであろう今は行方知れずの花魄を、白来光は見たいという。そのために蒼芹に取り入ったと。では、そうであるならば蒼芹は、  
「私は、その花魄を知っている……？」

「知っているばかりか、貴男は花魄が生まれる最も美しい瞬間を見ているはずです」

蒼芹の体がぐらりと揺らぐ。白来光はつかつかと近寄って、蒼芹の双肩を強く掴む。

「私は先生が羨ましい。貴男の祖父殿は究極の美を追い求め、それを叶えた。貴男はその瞬間を立ち会ったばかりではなく、その美をも手に入れたのではないですか？ 私の推測が正しければ、貴男はその花魄を」

「やめて白公子！ やめて！」

肩を強く揺さぶられ、頭痛の悪化する蒼芹は深酒をしたときのような気分の悪さに襲われる。視界がぐるぐるする。それを妻が止めようと、必死に手を伸ばしている。

「先生っ！ 思い出して下さいよ！」

「駄目！ そんなもの思い出さなくてもいい！ 妾から幸せを取り上げないで！ 妾達の暮らしを壊さないで！」

「あ……貴女は、それを望んでいるのでしょうか？ 青玉だってそうだ！ 私が見詰めると喜ぶんだ！ 貴女もそんな風に、もう一度愛されたいと思わないのですか！」

「もついいのです！ 妾は旦那様の傍に居られたら、それで……！」  
白来光はチツと舌打ちをし、蒼芹の胸座を掴み上げる。

「先生。花魄はね、見られることに喜びを感じるのはです。慈しめば慈しむほど、花魄は美しさに磨きをかける。花と同じなのです。先生、その花魄に名を付けたときのことを思い出して下さい。どんな思いでその名をつけたのか……。貴男はそんな大事なことだっ忘れていたのですよ？ それで良いのですか、先生ッ！」

されるがままに揺さぶられる蒼芹を、青玉が主の胸元から覗いて頬笑んでいる。それを見た瞬間、蒼芹の脳裏にあるイメージが鮮烈に浮かび上がる。

赤い木蘭の蕾が花開いて、小さな少女が蒼芹を見詰め、頬笑む。その眼差しは、夏の陽射しを受けて輝く野原の煌めきを秘めている。

「夏野の輝きは、まるで宝石の翠緑エメラルドのようだと祖父が言った。それを思い出したんだ」

蒼芹は呟きながら、ゆるゆると翠緑玉を見る。

「翠緑の瞳が綺麗だから、名付けた。翠緑玉」

「だ、旦那様……」

夏野の瞳から大粒の涙が零れている。泣かしているのは自分なのに、綺麗な泣き顔だと蒼芹は頬笑む。

「思い出した」

その日の祖父はとてご機嫌だった。食事を摂るときは妾を同席させぬ祖父が、珍しく妾達も呼んで、夕餉ゆうけの席はとて賑やかだった。食後、祖父は蒼芹に言った。

美しいものに貪欲になるのは、人であるが故。芹や、その美しいものを追及する道を選ぶのなら、もっと貪欲にならねばならぬ。美しいものに、触れねばならぬよ。

食後は部屋に籠もって絵の勉強に取り組むのが日課であったから、祖父は激励の意味でそう言ったのだと思った。そのつもりです、と言ってアトリエに籠もり、夜半時、蒼芹は喉が渇いて厨くりやに赴いた。

厨へ向かうには祖父の室の前を通らねばならず、夜半には房事の気配がすることもあるので、年頃の蒼芹はその時間にその場所を通ることを避けていたのだが、甕かめに溜めていた水が切れてしまつては仕方がない。耳を塞いで渡ろうとした。しかし、その日は邸内のどこも静まり返つていたのだ。不気味なほど。身震いをして足を再び歩ませると、回廊の向こう、蒼芹と年の近い妾・小娃こわが、祖父に髪を掴まれ引きずられていくのを目撃した。夕食時の団樂だんらんから想像もつかないような場面を見て、慌ててその後を追つた。祖父と妾達の関係に、蒼芹は口を挟めなかった。男女のことであるし、子どもが意見をするべきではないと思つていたからだ。男女の房事には様々な趣向があると、それくらいのは蒼芹も知つていた。だから、尋常ではない場面を見たとして、それを追及するのは野暮なことではないかという躊躇いもあつた。だから、建物の影から覗つて、何をしているのか確かめようとした。木蘭が一本そびえる庭、蒼芹は目を凝らして、驚愕した。そして体が自然と動いて、飛び出していた。

おじい様！

振り向いた祖父は狂氣の目をしていた。その足元には、腰を抜かす小娃と、血まみれになつた二人の妾が倒れていた。

芹や、お前も見に来たのかい。

これはおじい様のしたことなのですか？ どうして……どうしてこんな凶行を！

祖父は何かを待ちわびているような表情をして、手にした剣の血ち糊のりを袖口で拭くと、

お前にも見せてあげよう。儂が追い求めてきたもの……この世のどんな美術品より美しく貴重な宝を。

そして小娃に向き直り、剣を振り翳かざした。小娃は怯えきつていて悲鳴を上げられない。蒼芹は体が震えるのを抑えて祖父に飛びついた。

止めて下さい、おじい様！ おじい様ッ！

祖父は孫の体を強引に引き剥がし、蒼芹はその勢いで庭石に頭をぶつけてしまい、意識がぼうつとして祖父が剣を振り下ろすのを止めることが出来なかった。刃は小娃の肩から腹部までを深く割いて血が勢いよく噴き出し、返り血は木蘭の枝にまで飛び、枝先に一つだけ実を付けていた白い蕾をしとどに濡らした。蒼芹は声も出せない。木蘭は幹まで、三人の妾の血を浴びて真っ赤に濡れた。

おじい様……、なんて、なんて怖ろしいことを……！

芹や、黙って見ていてごらん。お前は最も美しい場面を見られるんだよ。

祖父は蕾を指しながら言った。蒼芹は言われるままに蕾を見詰めた。

赤く濡れた蕾が呼吸をするように一度震え、一瞬のことだった

花弁がふわっと開花し、そこに淡白い光に包まれた小さな少女が現れた。

それはあまりにも美しい花魄誕生の瞬間だった。花魄は、木蘭の小枝よりも尚細い四肢を伸ばし、体に纏わり付く長い髪をさらりと流しながら、母胎となった花の上になやかに立った。あまりに繊細過ぎる美貌に、蒼芹は殺人が行われたことも忘れて魅入ってしまった。

その花魄と、目が合った。それも一瞬のこと、祖父は蒼芹の視界に立って、喜色満面に血みどろの手を伸ばし花魄を捕まえる。

ああ、これが花魄か。なんと……。これほどまでに美しいのか。ああ、美しい、美しい……。

祖父の手が、花魄の白い裸体を赤く穢す。蒼芹は、それがひどく嫌だと思った。

思えば、その時蒼芹も、花魄の魅力に取り憑かれてしまっていたのかも知れない。

祖父は急に地面に頽れ、胸元を押さえながら蒼芹に訴えた。

い、いかん。興奮しすぎた……。芹、芹。薬をくれないか、胸が苦しい……。つ。

しかし苦しむ祖父には構わず、蒼芹は彼の手から花魄を奪い取る。何をする、芹！

花魄を取り戻そうとする祖父の手を、蒼芹は強かに弾いた。孫の行動に、祖父は瞠目した。信じてきたものに裏切られたような表情だった。しかし、それはすぐに苦悶に変わり、祖父は地面をのたうち回る。

芹、頼む、返しておくれ。芹、芹や……！

懇願する祖父を無視し、蒼芹は手中にある花魄の顔を覗き込んだ。きらきらした緑の眼が、真っ直ぐに蒼芹を見ていた。

ずっと、見詰めていたい……。

蒼芹が言つと、花魄はにこりと笑った。途端、蒼芹の全身を、痺れるような感覚が走り抜けていった。蒼芹と花魄は、暫し視線を交わし合った。

僕の、ものに。

すると、花魄の囁りと共に、頭の中に少女の声が響いてきた。

それが、告白の返答だと思った。

どれくらいそうしていただろう。蒼芹はもう四日も其処に座って、花魄を見詰めていた。発作の起きた祖父は、蒼芹が処置をしなかったためにこと切れ、物言わぬ骸と《むくろ》なっていた。妾達の死体も腐臭を発し始めていた。それなのに蒼芹は飽かず翠緑玉を見ていた。ずっと動かず、食事もせずになっていたから、蒼芹の体はすっかり衰弱していた。翠緑玉は心配して、心に訴えてきた。

いいんだ。君を見て死ねるのもいいだろう……。

こんなに美しいものを、見れたのだもの。その言葉はとうとう言葉に出来なかった。声を発するのも難しいほど、蒼芹は弱り切っていた。

翠緑玉の心の声を聞いたのは、それが最後だった。

「お前は、私を助けると言っ、私の前から消えた」

顛末を語り終えた蒼芹は、翠緑玉を真正面から見詰める。彼女は直視に耐えられず俯き、

「旦那様をお救いするには、姿を変えて助けを求めに行くよりなかったのです。でも、目覚めた旦那様は妾のことも忘れてしまっていた。それでも、旦那様は妾を信じて傍に置いて下さった。妾は幸せでした」

蒼芹は、翠緑玉の傍に寄る。

「お前は、私の求めに、いつまでも見詰めてくれるのなら……そう言っ、たな」

翠緑玉はこくと頭を頷かせる。

「雪花や青玉に嫉妬したのは……そのためか」

「だって悔しい。旦那様は妾を見詰めてくれなくなって、でも他の花魄は仕事だと割り切って見詰めるの。妾だって同じ花魄なのに何故？ そう思ったら胸が苦しかった。でも、それは我が儘でした。旦那様が真実を知ればきっと苦しむ、そう思うと打ち明ける事なんて出来ませんでした」

「馬鹿者……」

蒼芹は、子どものように泣きじゃくる翠緑玉を胸に抱き寄せる。

「私がお前を見詰められなかったのは、好きすぎてたまらないからだ。気持ちがありすぎて、疚しいとさえ思えるほどに愛おしくて……己の気持ちに正直になるのが怖かったのだ」

「旦那様……」

張り詰めた気持ちの心から氾濫するはんらんような気がして、翠緑玉は夫の胸にしがみつく。

「私は、ずっと花魄と共に居たわけだな。貴男の仮定は悉くしつぷく当たっていたわけだ、公子」

蒼芹は妻の髪を撫でながら、白来光を見上げる。

「私は蒼子環の花魄の存在を知ってから、ずっとそれを追ってきた。まさかとは思いましたが、大きくなって貴男と結婚していたとあっては……私は手出し出来ませんね」

残念そうな顔をして、でも、と言う。

「私はこの子を得られました。現代の世に生まれた花魄も魅力的ですが、先生、貴男が教えてくれた。こちらが愛情を以て接すれば、花魄も感情を得られるということ。本当はそちらの方が、もっとずっと魅力的であると気が付いたのです。だって、私に懷いて頬笑む青玉の代わりなんて、ないのですから」

翠緑玉はゆるゆると顔を上げる。

「妾の為に旦那様の家族は皆死んでしまった。どうしたら償えますか？ どうしたら」

蒼芹は翠緑玉の涙を指で拭う。

「違う。姐さんたちを殺したのは祖父だ。そして、その祖父を見殺しにしたのは私だ。お前は何も悪くない。何の罪も負っていないのだ。むしろ、罰せられるのは私の方だ……」

蒼芹は深く傷ついた表情をしていた。翠緑玉は涙が止まらない。

「蒼子環の罪は重いですよ。何しろ、個人の願望を果たすためだけに女を三人も斬殺しているのです。先生が見殺しにしくったって、捕まれば死罪は免れなかったでしょう」

「公子。それは、慰めているつもりですか？ 私に、責任を感じることはない？ だが、だが家族だった者だ……！」

蒼芹は苦しげに目を瞑る。

「貴男には、生きている家族を幸せにする義務があるのではないですか？」

白来光の言葉に、蒼芹はハツとして翠緑玉を見る。

「旦那様……。妾は人間じゃありません。それに傍に居れば、過去の記憶が旦那様を苦しめてしまうのかも知れない。でも、妾は貴男に愛されたいの。いいえ、愛してくれなくてもいい。妾をモノだと思って、美術品みたいにしてくれてもいいの。見詰めてくれるだけ」

でいい　そうされると嬉しいの。それが全てなの」

嗚咽おえつを漏らして泣く翠緑玉を、蒼芹はもう一度、今度はぎゅっと力を込めて抱いた。

「馬鹿……。私にはお前しか居ないって、そんなこと、判りきっているだろう」

\*

蒼芹はカンバスに筆を走らせる。モデルは翠緑玉だ。木漏れ日の下で頬笑む彼女は、本当に美しい。何枚目か知らないほど彼女の表情を描いたが、どれ一つ同じものはない。だってころころと移り変わるのだ。描いても描いても全てを捉えることは出来ない。でも。描くことが重要なのではないと、思い知らされた。彼女をカンバスに閉じ込めるなど、思えばいいところだ。美しい瞳が蒼芹ただ一人を見詰め、蒼芹もまた翠緑玉だけを見詰めている。瞳を交わし合う中に生まれる幸福を、蒼芹は噛み締める。

「君に奥方を描かせようとしたのは間違いだった。なにしろ仕上がってくる絵の殆どが、発表するのも恥ずかしいほどなんだからな」  
休憩を見計らって様子見に來た黄戒が、手ぬぐいで汗を拭きながら文句を言う。

「妬けるだろう。なんたって、私の惚気をこれでもかと言うほど塗り込めているからな」

友人にさらりと報復をし、冷茶を持って來た翠緑玉を見詰める。

「よさないか、暑苦しい。雨季が過ぎてますます暑くなったというのに、たまらんよ！」

黄戒は手を振って二人に離れるように示すと、手ずから冷茶を取り一気に飲み干すので、蒼芹と翠緑玉は顔を見合わせて笑った。

「それより、君に絵を描かせるのを諦めた白公子だが、それならば自分かと、自ら絵筆を持ちだしちゃってね。氏の所有する花魄をモデルに描き始めたんだ」



蒼芹はほう、と感心する素振りを見せ、

「あの人は、我ら夫婦がよっぽど羨ましいのだな。そのうち青玉を嫁に娶るかもしれん」

夫婦二人笑い合うと、黄戒は「はあ？ あんな小さい嫁では夫婦の営みが成らんだろう」と首を傾げ、

「それより、面白いのは氏の画力だ。モデルをやっている花魄が可哀相だ」

黄戒によれば、それは彼の五歳になる娘レベルなのだと言う。

「じゃあ、今度講義してやろうか」

蒼芹は筆を置いて、頬笑む翠緑玉から冷茶を受け取る。

「こちらの仕事も真面目にやってもらいたいな。少数ながら、君のファンはいるんだぜ？」

完成間近のカンバスを覗き込みながら、黄戒は溜息混じりに言う。

蒼芹は凝った肩を解すように背伸びして、

「それは難しいな。なにしろこちらは二十年分の穴埋め中なんだ。なあ？」

蒼芹が振ると、翠緑玉は羞じらい気味に笑う。黄戒は「やれやれ」

と頭を振り、

「君達は以前に増して仲睦まじいが、これからもつと暑くなる。熱いのもほどほどにな！」

黄戒は団扇うちわをめいっばい扇がせて帰っていった。

「ははは……彼奴あいつも羨ましいのだろうな」

ケタケタ笑っている、翠緑玉が顔を間近まで寄せてきた。多少照れが残るが、蒼芹は夏野の眼差しを逸らさずに受け止める。

「ねえ、旦那様は、小さい方と大きい方、どちらが良かったのかしら？」

妻の質問に、「そりゃあ後者だ」と蒼芹は答える。

「だって、夫婦の営みが成らないからなア」

友人の言葉を拝借すると、翠緑玉は声を立てて笑った。

カンバスの中の翠緑玉は、直視を躊躇あだわせるほど婀娜あだっぽい双眸

を、蒼芹に向けている。

(後書き)

ご意見ご感想があれば、お気軽にお寄せいただけると嬉しいです。

メール: [information@mond.jp](mailto:information@mond.jp)

@)

WEB拍手: <http://clap.webclap.com>

/clap.php?id=ginkenbunko)1000文

字まで投稿可)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8488n/>

---

花魄（かはく）

2011年4月4日23時40分発行